

オンライン授業でも「安心」を

佐久間敦史（大阪教育大学）

一斉臨時休校の中で始まった2020年度。夏休みの短縮や行事の縮小など、子どもたちにとって、不安な1年でした。保護者や地域のみなさんもたいへんだったと思います。そんな4月、府内に勤める、本学を卒業してまだ数年の先生から相談がありました。「オンライン授業をしようと思うのですが、どのような授業を創ればいいでしょうか」と。私は、「普段と同じ。一番気になる子に、ちゃんと届く授業を工夫して創りましょう」と話しました。

学校の先生は、普段から研究をしています。「学習指導演」(レシピや設計図のようなもの)を創り、子どもたちと同僚などを前に「研究授業」を行い、反省会をします。「すべての子どもの参加を促し、楽しく有意義な授業だったか」など、各校の研究課題にそった討議です。これは「授業研究」と呼ばれ(諸外国には「Lesson Study」と訳され)、日本の質の高い教育の源と評価されています。

ところが、プロの料理人が試行錯誤を重ねるように、教育のプロが創る授業もそう簡単に大成功とはいきません。考え抜いた授業であっても、手が挙がらなかったり、手遊びが始まったりもします。ましてや、オンライン授業。子どもたちの刻々とした表情や、「わからん…」というつぶやきも拾えない。思慮のないオンライン授業では、興味のないテレビ番組と同じように、チャンネルを変えられたりトイレに行かれたりします。実は、オンラインだからこそ、通常の授業以上に研究と技術が必要なのです。

さて、冒頭の先生。クラスには聴覚障がいのある子どもがいます。無配慮なオンライン授業にはとても参加できない。そこで、ゆっくりとした口調で言葉を精選し、手話を使いながらの動画授業を創り配信されました。それを観たその子の気持ちは、想像に難くありません。では、それを観た「健常」の子どもたちはどうでしょうか。

「先生は、こんな大変なときにでも、私たち一人ひとりのことを考え、授業をしてくれている」と、無意識にでも感じたでしょう。こうした「隠れたメッセージ」は、子どもに「安心」として伝わります。「教師は、しんどい子にだけ特別な配慮をしている」というような声が聞かれます。しかし、「あの子」に配慮できない先生が、次に「うちの子」に何か困難があったとき、配慮ができるでしょうか。今、最も厳しい立場に置かれている「あの子」にこそ、温かいまなざしを向けることができる、そんな先生、大人、地域でありたいと思います。